



aaca
2024.05

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.

98

共鳴するプラハの聖堂音楽

樺山紘一 歴史家

晩秋にプラハで

はじめて、その聖堂の夜間コンサートに聞き入った時間のことを、いまも忘れることができない。10年ほど昔の晩秋、東欧はチェコの首都プラハ。中世にさかのぼる市街地のただなかに、その聖堂はある。聖イジー教会とチェコ語で発音するが、ドイツ語ではリジーと、また英語で綴れば、聖ジョージともよめる。また、同名の由緒ある聖堂も市内にもうひとつある。

さてその日のプラハは、とても寒かった。到着して最初の仕事とはいえ、デパートにとびこんで厚手で武骨な毛糸の手袋を入手すること。つぎには、その近傍にある聖イジー教会のコンサートをめざして、その晩のコンサート・チケットを入手すること。

知られるとおり、チェコという国は、第二次世界大戦後に、けわしい辛酸をなめつづけていた。1968年には、ソ連の東欧支配体制に反抗して、自由化をもとめ、「プラハの春」を華やかに演出して、大弾圧を受けた。1989年には、隣国ドイツでの「ベルリンの壁」崩壊によって、「ビロード革命」を。ようやく、ロシアの桎梏から脱して、東欧の自由化の先頭にたった。その市民革命は、いずれも首都プラハの街頭における、市民の叛逆に端を発したものだ。じつは、その痕跡は、いまなお聖イジー教会の周辺に、なまなましく残っている。

さらに言えば、聖イジー教会の並びには、ベツレヘム礼拝堂という古い会堂が立つが、じつははるか600年も昔、チェコ(ボヘミア)の信徒たちが、予言者ヤン・フスの激しい教会改革理想の演説に聴き入った場でもある。聖イジー教会は、じつにその長年のプラハ市民の情熱の体温を、現代までもまちかで感知してきた。

聖イジー教会の音響

さて、コンサートの開演まで、ちょっと手間どってしまったようだ。ようやく主廊の正面、祭壇を中心として、弦楽器と管楽器

の奏者が、10人ほどしずしずと登場する。バロック風の衣装をまとって、クラシック音楽の雰囲気もたつぷりと演出。数十人の聴衆は、寒々とした聖堂内に着座して、静かに開演を待つ。フレスコバルディやモンテヴェルディの序章から、やがてはバッハにいたる、バロック曲の連続が進行する。すこしずつ、体内が温まってきた。

そこへ、突如として後方の頭上から、巨大な音響が振り落ちてくる。はじめは気づかなかったけれど、正面祭壇のちょうど反対側。10メートル以上もある階上に、大柄なオルガンが据え付けられており、そこから満堂にむけて、あの金属音。ほとんど巨大な滝のように、わたしたちの頭上に、東となって振りかかる。その驚き。

さて、このように東欧プラハの聖堂音楽状況を報告してみた。むろん、これは聖イジー教会だけの事情ではない。その首都にも、いくつかの類例がある。西洋古典音楽の故郷というべき都市では、昨今こうした演奏会が人気をよび、聴衆をあつめているという。もちろん観光名所としても。そこでは、事情がよければおなじような経験に遭遇できるにちがいない。

いくつもの楽器から発出されるべつべつの楽音。後陣から降りそそぐオルガンのどでかい爆発音。石造の壁面や石柱に跳ね返ってくる、管楽器の鋭い挑発音。さまざまな楽音が、わたしにむけて落ちてくる。ヨーロッパで古来、人びとが体験してきたように、ロマネスクでもゴシックでも、どんな建造様式であれ、堂内の音はちいさな楽器音でも、人声であっても、重い反響音となって、人の耳に到達したことだろう。聖堂はみな、石造を基本としたのだから、広大な面積と天井高とを体現している。聖イジーのように巨構をほこる聖堂にこそ、その特徴がよく現れているともいえようか。

頭上から降り降りてくるような楽音が、隣席の老女にも。その先の青年にもひとしく共有されていることを、たとえばもない至福と感じとっていた。こんな実感を噛みしめていたのも、じつはかねてから抱いてきた、つぎのような想いをそのとき、あらためて噛みしめていたからである。

直立歩行の共鳴の力

わたしたち人間(つまりホモ・サピエンス)は、特有の外界認知の方式をもっているようだ。類人猿からの進化のプロセスで、わたしたち人類は、直立歩行という特別な身体構造と行動方式を獲得した。その結果として、重い脳をもちこぶことが、可能となったという。さらには、直立歩行するヒトは、直上や斜めからの情報や攻撃に対応することが容易となった。動物界のなかでは、さして抜群の身丈をもっていないのに、直立のおかげで、上方や斜め上といった方向での認識や行動の可能域を獲得した。

しかも、同僚のヒトとのあいだで、正面からの対面がふつうとなり、感覚刺激を受け入れるレンジは、ほぼ360度にまで広がった。ひとつひとつの感知能力は、ほかの動物たち、つまり背と腹を上下に向ける動物よりもかなり劣った生物でありながら、ヒトは直立歩行によって、外界をタテ方向からも捉えることが可能となった。ヨコ向き移動する有能な動物たちにあっては、タテ方向への認知や移動が思うに、まかせられなかったのに。

直立歩行するヒトは、いま聖イジー教会の満堂にあふれる楽音を、腹からも背からも、そして加えて頭上からも脚元からも、ひとしく受容することができる。もちろん、その突先は、まずは頭蓋についたふたつの聴覚器、つまり耳に限定されているかにみえるが、じつはたぶん皮膚からも体毛からも、楽音を聴取して、その刺激を体内におくりこみ、蓄蔵しているにちがない。「腹にしみわたる低音」とか、「肌を撫でるような甘い音」といった比喩は、そんな実体の表現なのかもしれない。

わたしの考えでは、直立歩行のヒトが全身をもって前後や左右、上下からの音を感知する認識能力こそ、じつは「共鳴」力とよぶべきではないだろうか。たんに空気振動の伝達によって、聴覚能力を刺激する波動ばかりか、わたしたちヒトは、身体のいくつもの部分で音波を感受している。直立歩行のおかげで、わたしたちの感受力は、聖堂にしつらえられた石

造の天井にも、側壁にも向けられ、ふりそそぎ乱射される楽音を皮膚のなかに取り込むこともできる。

ヒトの身体は、タテとヨコと上下の3次元から楽音を受け取ること、全身で外界と共鳴する。そして並居る聴衆という多数の共鳴箱は、ついには聖堂をこえて市街地全体を揺るがす音楽につつまれるかのようだ。

話はここで冒頭の主題にもどる。プラハの市民たちの身体は、このしめやかな楽音ばかりではなく、ことによると都市や住居の壁にひびく音響のさまざまな、共鳴音として受容したにちがない。そしてついには共鳴を求めて発信する「直立歩行」する市民の大群に変身することもあっただろう。

プラハ市中での「プラハの春」合唱も、「ビロード」革命の凱歌も、そして聖イジー教会の外壁に響いたフス派信徒たちの祈りの声も。それらもまた、かつての市中に共鳴音をうながし、そして歴史をこえて、いま21世紀となっても、プラハの音響となって、鳴り響いてくる。終演のあいさつを耳にして、そんな幻想をかみしめながら、わたしは、聖イジー教会の重い扉を押し開けて、プラハの街に歩みでる。モラヴィア産の赤ワインの杯をもとめて、石畳の道をたどっていくことにしようか。



樺山紘一(かばやまこういち)

1941年、東京生まれ。東京大学大学院修士課程修了後、京都大学人文科学研究所助手を経て、1976年から2001年まで、東京大学文学部助教授・教授。のち国立西洋美術館長、ついで2021年まで印刷博物館館長。現在、渋沢栄一記念財団理事長など。専門は、西洋中世史、西洋文化史。おもな著作は『西洋学事始』、『ルネサンスと地中海』、『歴史の歴史』、『ヨーロッパの出現』など。2024年、日本建築学会文化賞を受賞。

パブリックスペースをアートで多元化する：ニューヨークの試み

工藤安代 NPO法人アート&ソサイエティ研究センター代表理事

ニューヨーク市はパブリックスペースにアートを積極的に取り入れている。その歴史を紐解くと、1967年から始まった市の公園局（現在の公園レクリエーション局）による「公園のアートプログラム（Art in the Parks Program）」まで遡る。1982年には公共施設予算の1パーセントをアートに充てる「アートのためのパーセント（Percent for Art）」を制度化し、翌年には交通局による取り組みが続いた。現在では市民による様々な試みが実行され、ニューヨークの街は文字通り“アートで溢れた”都市である。

米国を代表する文化都市として、ニューヨーク市が公的にアートを街に取り入れてからすでに半世紀が過ぎる。その傾向は21世紀に入り、ブルームバーグ市政期に爆発的に広がっていった。NYでの事例を見ていくことで、「アートはなぜ現代都市に必要とされるのか？」という日本社会への問いかけに役立つヒントがあるのではないかと。早すぎる変化のなかで複雑化する社会、論理的思考での問題解決が行き詰まり、直感的・感性的アプローチが期待される社会、不安定で不確実性が高まる社会において、アートは「飾り物」という価値を越えて、未来の社会のビジョンを描くうえで、生き生きと新しい血を巡らせ、イノベーションをもたらす活力になるかもしれない。

パブリックスペースにアートを展示する意味は、時代の推移と共に変わってきた。今日では都市のブランディングという役割に加え、社会の多様性を表わそうとする意味も大きい。様々な文化的背景を持つ誰もがアクセス可能な場であり排除されることのない平等性や、人間の自由な表現活動を認める場として、社会の包容力や寛容性を示す意味を持つ。多様な人びとが共生できる社会を形成していくことが、実は都市のレジリエンスを高めることにつながるからだ。

とはいえ、アートにはお金もかかる。そのための資金調達は米国らしい工夫がなされている。行政だけではなく民間を取り込んで、市民の協業という形を巧みに実現させているのだ。



マディソン・スクエア公園

テレジア・フェルナンデス《蜃気楼》 2015.6/1 - 2016.1/10

ミラーの透かし彫刻が夏の日差しをさえざる機能を兼ねそなえ、半年あまり公園の空を覆い修景を映し出す。支援：ゲルマン財団

◎街と公園をアートでつなぐ

公園や広場の再生事業において、街路や周辺地域とつなげるには行政の縦割り構造を変える必要がある。マンハッタンでの公園再生には柵を取り払い公園と街路をシームレスにつなげる試みがなされて久しいが、心理的にバリアフリーとするために、アートプログラムが積極的に取り入れられている。市民のパートナーシップによる公園の管理・運営がなされ、アートプログラムに専門家を雇用している公園も現れている。

《NY市公園レクリエーション局の公園アート・プログラム》¹

プログラムは1967年に開始された。常設コレクションとして800を超える公共記念碑があり、公園にアートを仮設展示するプログラムでは、1年未満（通常は3-6ヵ月間）の現代彫刻作品や実験的アートの設置をサポートしている。NY市内にある公園はすべて対象となり、アートにより公園の美化や活気づけを目的に加え、社会的交流をもたらしアーティスティックなプロジェクトが求められる。

・マディソン・スクエア公園²

マディソン・スクエア公園は、マンハッタンのマディソン街とブロードウェイに挟まれた23-26丁目に位置する都市公園。公園を管理するのは「マディソン・スクエア公園保全非営利法人」で、ニューヨーク市公園局と連携して、公園内の植栽整備や安全管理を行なう。アートプログラムも充実しており、アートキュレーターを置いて、国際的なアーティストや新人アーティストの招聘をし、実験的な作品を公園内に実現させてきた。展示期間は約3ヵ月程度。運営資金は公園局の他、ニューヨーク文化部門による公的サポートの他に、民間企業、財団、基金などからの寄付による。

・セントラルパーク：ドリス・C・フリードマン・プラザ

NYでは、特定のテーマやミッションを持ったNPO団体が数を増やし、活動への資金提供者も積極的にプロジェクトそのものに関与するようになっている。

1977年設立の芸術NPO法人「Public Art Fund」もそうした追い風を受けて、2000年以降、急速に活動規模を広げている。セントラルパークの南東入口の広場にはPublic Art Fundの設立者の名前がついた〈ドリス C. フリードマンプラザ〉があり、現代アートの期間展示を運営・管理している。フリードマンは、人々が日常の環境の中でアートを体験し、美術館やギャラリーを超えて芸術にアクセスできるようにし、ニューヨーカーにとってより多くの機会を創出することを願い、こうした文化活動を始めたという。



セントラルパーク
 フランツ・ヴェスト《エゴとイド》2009.7/15-2010.8/31
 国際的に評価の高いフランツ・ヴェストによる最大のアルミニウム製彫刻。
 スツールとなり、通行人が小休憩できる



トライベッカ公園
 ニコラス・ホリバー《ゴリアテの頭》2015.5/4-9/15
 街から出た端材や再利用物が組み合わせられる。ホリバーは
 「ニューヨークの公園で作品を展示するのは、街の環境が彫刻に与える影響を
 観察する格好のチャンスだ」とこのプログラムの魅力を語った

◎街路を広場へ ―歩行者空間の魅力を上げる―

ハイライン³

マンハッタンのウエスト地区の廃線となった高架鉄道跡を都市公園に再生し誕生した「ハイライン」。世界中からNYを訪れる観光客に人気のスポットで、周辺の不動産開発も急速に進み、高級コンドミニアムやホテル、プティックやレストランができ、200軒以上の現代アートギャラリーが立ち並ぶ切尔西地区の真ん中を横断している。東京銀座周辺の高速道路（KK線）を緑化し遊歩道とする計画のお手本となっている。地上9mの高さから眺める景観を楽しみながら街を歩く楽しみを味わえる。

ハイラインは地元住民により結成された「Friends of the High Line」により管理・運営されている。最南端にレンゾ・ピアノ設計によるホイットニー美術館がアッパーイーストから移転し、益々アート力が高まったこともあり、独自のユニークなアートプログラム「ハイラインアート」が展開されている。都市生活に不可欠な要素である対話を引き起こすことを目的として、ビデオアートやパフォーマンス、ビルボードを使った作品など、多様な表現のアートが定期的に企画される。資金は、全米芸術基金、NY州と市芸術基金などの公的資金の他、アマンダ&ドン・マレンによる民間支援を受けている。

2019年には、30丁目に広場「スパー（The Spur）」が完成し、人々が集えるこのスペースにて新たにアートプログラム“台座（The Plinth）”を始めた。18ヵ月間スパーに展示され、記念碑の定義を再考する様な現代アートを公募する試みだ。

《ニューヨーク市交通局によるアートプログラム：DOT Art》⁴

NY交通局はアートプログラムを2008年に開始した。以後、交通局の多様な所有地に期間限定（最大11ヵ月）のアート作品を展示している。対象地は美化が必要で、アート作品を展示するのに十分な広さがあり（共広場、歩道、中央分離帯、フェンス、橋梁等）、多様な人々がアクセスできることを条件とし、アーティストやパートナー組織、ギャラリーや非営利団体と連携してユニークなアート作品を展示している。

「DOT Art」は、興味を持つ組織やアーティストが自主的に提案書を提出することが前提となる。アート作品の設置をしたい場所を提案し、そのための全額資金を提供する責任がある。パートナー団体の支援がない場合、アーティストは応募する資格を得られない。交通局はプロジェクト費用を一部負担する他、作品設置の技術的サポートを行なう。

・サマーストリート: パークアベニュー 公共彫刻プログラム⁵

市交通局の主催によりパークアベニューでは8月の毎土曜日に車道を市民に開放する「サマーストリート」を実施している。期間中、マラソンやサイクリングをする人びとで溢れ、普段落ち着いたパークアベニューが活気づく。ニュー Yorker たちの背後には中央分離帯を舞台として、ユニークなアート作品が立ち並ぶ。パークアベニュー基金とNY市の公園レクリエーション局により1999年から開始されたプログラムだ。著名な彫刻家の作品を2-4ヵ月、中央分地帯に連続的に展示していく。



ハイライン

サラ・ジー作《風景のある静物画》2011.6-2012.6
作品の小箱は小鳥や虫、蝶などのための水飲場。
作品構成は3次元の透視図をイメージしている



ハイライン

ファビム・マジド作《フリーダムズ・スタンド》2022.9-2024.2
米国の黒人新聞の役割へのオマージュとしての作品。
新聞の見出しや記事、写真、広告が展示。月ごとに内容が入れ替えられた



パメラ・ローゼンランツ《古木》2023.5-2024秋

スパーに一年間展示された。写真提供: Empire State Development



スパーの第5、第6台座委員会の最終候補リストによる提案の展示風景
(2024.3-6月)。訪問者は実現してほしいプランをフィードバックできる。
写真提供: Timothy Schenck



パークアベニュー中央分離帯に、世界貿易センター跡地の地下鉄駅を設計した
スペインの建築家サンティアゴ・カラトラバによる彫刻作品が点々と続く。
2015.6/8-11/1 支援: パークアベニュー基金、マルボロ・ギャラリー

◎民間開発と規制緩和で生まれた公共空間と現代アート

民間の所有地でありながら、公共空間として開放する公開空地は、日本でも数多く整備されている。NYではプラザボーナス制度(1961年)以降、民間の不動産開発によってできた民有公共空間(Privately Owned Public Spaces)が数多く開発された。それによって生まれたオープンスペースにもアートが活用されている。

・ロックフェラーセンター・プラザ

市内でもっとも有名な民有公共空間であるロックフェラーセンターの広場。多くの観光客が集まる観光スポットで展示されるアートがインパクトを与える。

・シーグラムビル・プラザ

ミース・ファン・デル・ローエが設計した歴史的建築「シーグラムビル」(1958年)。パークアベニューから大きくセットバックさせてつくった“プラザ”は、開発当時、都市のオープンスペースとして市民からも評判となり、不動産開発者にインセンティブを与える公開空地の発想を生み出し、その後のビル開発に大きな影響を与えた。実はシーグラムプラザは、ここ数年、巨大な現代美術インスタレーションの行列の舞台となっている。

・ワン・ヴァンダービルト⁶

容積率緩和制度のもとで2020年にできた超高層ビル。尖塔を含む高さは427mで、NY市で4番目に高いビルとなる。グラントセントラル駅のすぐ西にあり、42丁目とヴァンダービルト・アベニューの角に位置する。最高階にある「SUMMIT」は、これまでの展望台の概念を変えるような、アートとテクノロジーの要素を融合したエンターテインメント施設。

・ハドソンヤード

ハイラインの「スパー」の先には、米国で最大の250億ドルの民間開発事業で誕生したハドソンヤード。パブリック・スクエア&ガーデンはネルソン・バードウォルツ・ランドスケープアーキテクツの設計。アート作品はハドソンヤードの各ビル内にコミッションされており、商業モールとオフィスビルのエントランスといった屋外空間から中央広場まで、常設アート作品や期間展示作品までがシームレスに続いている。



ロックフェラーセンターのプラザ

ウーゴ・ロンディノーネ《ヒューマン・ネイチャー》2013.4/23-7/7
支援: ネスプレッソと非営利団体、スイス芸術評議会



シーグラムプラザ、パークアベニュー53丁目

ウスル・フィッシャー《Big Cray #4》2015.5/11-9/1

粘土を無造作に重ねたような巨大彫刻。

今や世界一位の実力を誇るガゴシアン・ギャラリーが展示をサポートした。
アートビジネスの力を活用し、高額な彫刻作品を公共空間に展示



ワン・ヴァンダービルドのエントランスロビー

トニー・クラッグによる常設作品が展示された



ワン・ヴァンダービルトビルとグランドセントラル駅をつなぐ空間
チームラボによるデジタルアート《永遠の今の中で連続する生と死II》2020が
常設展示された



10 ハドソンヤード、西ロビー
ジョナサン・ポロフスキー作《人間の彫刻と意識の光》



30 ハドソンヤードのロビー
ジャウマ・プレサ《声一文字やその他の要素で作られた鋼鉄の球体》
西側のエスカレーターの頂上に浮かぶ



ハドソンヤードの中央広場 エリー・ストリートアートによる壁画作品。
アートプログラム「HY×OffTheWall」の一環で制作された

都市のアートプログラムを活性化するには、公共だけではなく民間との協業が欠かせない。民間からの寄付を促がすための税制優遇制度も強いインセンティブとなる。日本ではどのような形があり得るのか？ ひとつは企業によるふるさと納税などが取り組み易い形かもしれないが、税制上のより良いスキームを考えることが今後の課題となるだろう。

*参考文献

中島直人編『ニューヨークのパブリックスペース・ムーブメントー 公共空間からの都市改革』2024年、学芸出版社

*撮影(提供写真以外):筆者

- 1 <https://www.nycgovparks.org/art-and-antiquities/art-in-the-parks>
- 2 <https://madisonsquarepark.org/art/exhibitions/>
- 3 <https://www.thehighline.org/art/>
- 4 <https://www.nyc.gov/html/dot/html/pedestrians/dotart.shtml>
- 5 <https://fundforparkavenue.org/pages/sculpture>
- 6 <https://onevanderbilt.com/>



工藤安代(くどうやすよ)

東京生まれ。南カルフォルニア大学大学院修士課程、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程を修了。民間会社にてパブリックアート事業に携わった後、2009年特定非営利活動法人アート&ソサエティ研究センターを設立。以後、社会・地域における芸術文化活動の情報発信・調査研究・実践活動に取り組む。国内外のアート活動を紹介する『Public Art Magazine』誌の発行やアーツカウンシル東京とのアートプロジェクト・アーカイブ事業を行なう。2021年アートブレイス株式会社代表取締役社長に就任。主な著作に『パブリックアート政策』、翻訳『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』など。

レンガ建築は地震に強い？ その美しさのヒミツと進化

小野達大 東京ブリック社



職人が一つずつレンガを積んでいく姿は、見ているととても気持ちが良いものです。組積したレンガの上に適度に柔らかいモルタルをふわりと均し、その上にまたレンガを乗せてレンガ罫^{こて}でカンカンと叩き沈め、水平にピンとはった糸を頼りにレベルを合わせて積み上げていきます。一つずつだったレンガが建築物へ変わっていく姿です。



建築構造物を断熱材で包み込み(外断熱工法)、外装としてレンガを組積中

◎レンガの歴史

レンガの建築材料としての歴史は紀元前数千年前の世界四大文明の時代まで遡ります。当時の建築物で現存しているものもあり、優れた耐久性を有する素材として知られています。

日本にレンガが伝わったのは江戸末期。銅を溶かす反射炉建設のために耐火レンガを製造したのが始まりです。その後長崎にて、一般の建造物に使う赤レンガの製造が行われるようになり全国へ広がりました。明治期には、新しい建材を用いる国策事業としてレンガは多く使われましたが、濃尾地震(1891(明治24)年)、関東大震災(1923(大正12)年)の大地震によるレンガ造の建物の被害は甚大で、それ以降、レンガ造の採用は激減しました。レンガ造は地震に弱いと、私たちの深い記憶に刻み込められる事となった大きな出来事です。

その一方で、大地震を受けたにも関わらず現存しているレンガ造の建築は多数あります。それらの建築は、鉄骨や鉄筋でしっかりと補強されている場合が多く、また、適切な配合でモルタルを調合して組積されていました。地震により倒壊したレンガ造の建物は、(セメントが高価だったため)目地にセメントが十分に使用されず、漆喰の原料を主体で組積されていた建物が多かったようです。

◎レンガの魅力

現存しているレンガ造の建物の多くは「残すべき建築」として多くの方々に愛され、大切に扱われています。

私自身も、一つずつが不揃いで同じものがない、所々欠けたり割れたりして、ダメージを伴っている古いレンガの壁を、愛着を持って見てしまいます。時間が経つことで得られる工芸的な美しさ—例えば、同じ赤レンガでも黒ずんでいたり、柿

色やさび色だったり—がそれらのレンガの壁にはあるのです。その絶妙なエイジングがレンガの魅力です。事実、レンガ造が文化として根付いている欧州などでは年代が古いもののほど価値が評価されています。



ノーベル賞の記念晩餐会が行われるストックホルム市庁舎の竣工は1923年

レンガは、粘土や頁岩^{けつがん}、泥を直方体の型に入れ、窯で焼き固めて、あるいは圧縮してつくられます。赤く発色するのは、粘土に含まれている鉄分が、焼成されることで酸素と結びつき酸化鉄となるからです。レンガは土と炎と煙の関係で色味が変わります。また焼成する燃料でも発色が変わります。レンガの焼成は、現代は重油やガスで行っていますが、昔は主に薪や石炭を用いていました。薪や石炭は効率が悪いのですが、そのことによりばらつきが生まれ、かつ薪や石炭独特の色味が現れます。焼成温度も低く、そのことにより柔らかな風合いになります。窯の内部で完全に焼成されている部分は綺麗な赤レンガの朱色となりますが、火の通りが良すぎたり、悪いところ、石炭が付着した部位などは黒ずんだり変形したりします。綺麗な赤レンガは一等品として建物の表面に来るように組積されることが多く、二等品は内側の構造部分などで使われていたようです。

一方、品質が安定しないことによる弊害として、吸水率が高くなり周囲の環境によって黒ずみが出てきたり、部分的には凍害を起こすなどの事象があります。しかし、その経年変化のダメージが私たちには歴史を感じさせる美しさにも繋がっているのです。

ところで、レンガの表面に刻印があるレンガを見たことはありますか？ かつては製造所ごとに刻印が押されるケースが多かったようです。有名な刻印としては、現在の東京拘置所の前身である小菅刑務所の受刑者によってつくられたレンガの桜のマークというものがあります。それらは過去を知る重要な手掛かりとなります。

◎現代レンガの挑戦

現代の日本では、その魅力の一つである昔のような柔らかな

レンガをつくることは、残念ながら難しくなっています。その要因はいくつかあるのですが、最も大きな要因は、レンガに日本工業規格(JIS)が定められたことによります。品質の良い、均一なものを求め基準を設けた結果、面白みが少ないレンガが一般的となってしまいました。もちろん、基準をクリアしたレンガにも大きな利点があります。耐久性が増し汚れづらく、建築に使われてもメンテナンスフリーという大きな特徴を有するようになりました。

とはいえ、皆さんの「レンガ」のイメージは、均一に貼られたタイル張りのようなものではなく、アンティークな温かみを感じさせるものではないでしょうか。

そんな中、焼き物の特性を活かし「土もの」の良さを表現したいと願い、それを実現している窯元もあります。このような窯元は採算を重視して一般的なレンガを大量生産するよりも、一つ一つにこだわりを持ち、かつ品質を保ち製造しています。そして、それらのレンガは世界的に見ても日本独自の進化を遂げつつあります。

一例をご紹介します。



日本独自の「大型化」されたレンガ。一般的なレンガが210×100×60mmに対し、440×100×90mmある。特殊施釉を施し、アンティークな表情をつくりあげている



また、それらのレンガを用いた工法も日本ならではの進化を遂げてきています。プレストレスにより補強した(*)レンガ造のルーバーや自立の壁、目地にモルタルを用いずゴムスペーサーと鋼管で構成する地震国ならではの乾式のレンガスクリーンなど。世界的にも類を見ない工法が誕生してきています。

* 縦にプレストレス鋼材を挿入し、プレストレス力によりレンガ壁に均一に圧縮応力を入れ、強度や剛性などを増大させる。

レンガの未来は、これまでの積み重ねを紡ぎ合わせたAIの解決策だけでなく、これからの新しい発想や挑戦、職人魂でより進化できるのではないかと考えます。

そして、冒頭でもお伝えしたようにレンガという素材は耐久性を有し、皆に愛される特徴を持っています。それらの特徴を十分に生かし、今後の建築や文化に引き続き貢献できるよう努めてまいりたいと思います。



上州富岡駅(群馬県富岡市) 高さ5mの自立レンガ壁。プレストレス工法



勝浦市芸術文化交流センターKüste(千葉県) レンガルーバー。プレストレス工法



コーセー先端技術研究所(東京都北区) 乾式レンガによるスクリーン



万世橋区民館(東京都千代田区)
外装乾式レンガによる雨水貯水槽ブリックシェード

七福神巡り2024

開催日:2024年1月13日

会場:東京・青山周辺

情報文化研究委員会

情報文化研究委員会では、長年にわたり年初に、福を呼ぶ街歩き「七福神巡り」を実施してきました。目黒・池袋・雑司ヶ谷・三鷹・柴又・多摩青梅・恵比寿・池上・新宿・入谷・羽田蒲田…、そして2024年は青山の七福神。aaca会員の老若男女が集まり、楽しい話を伺いながらの街歩きが続いています。

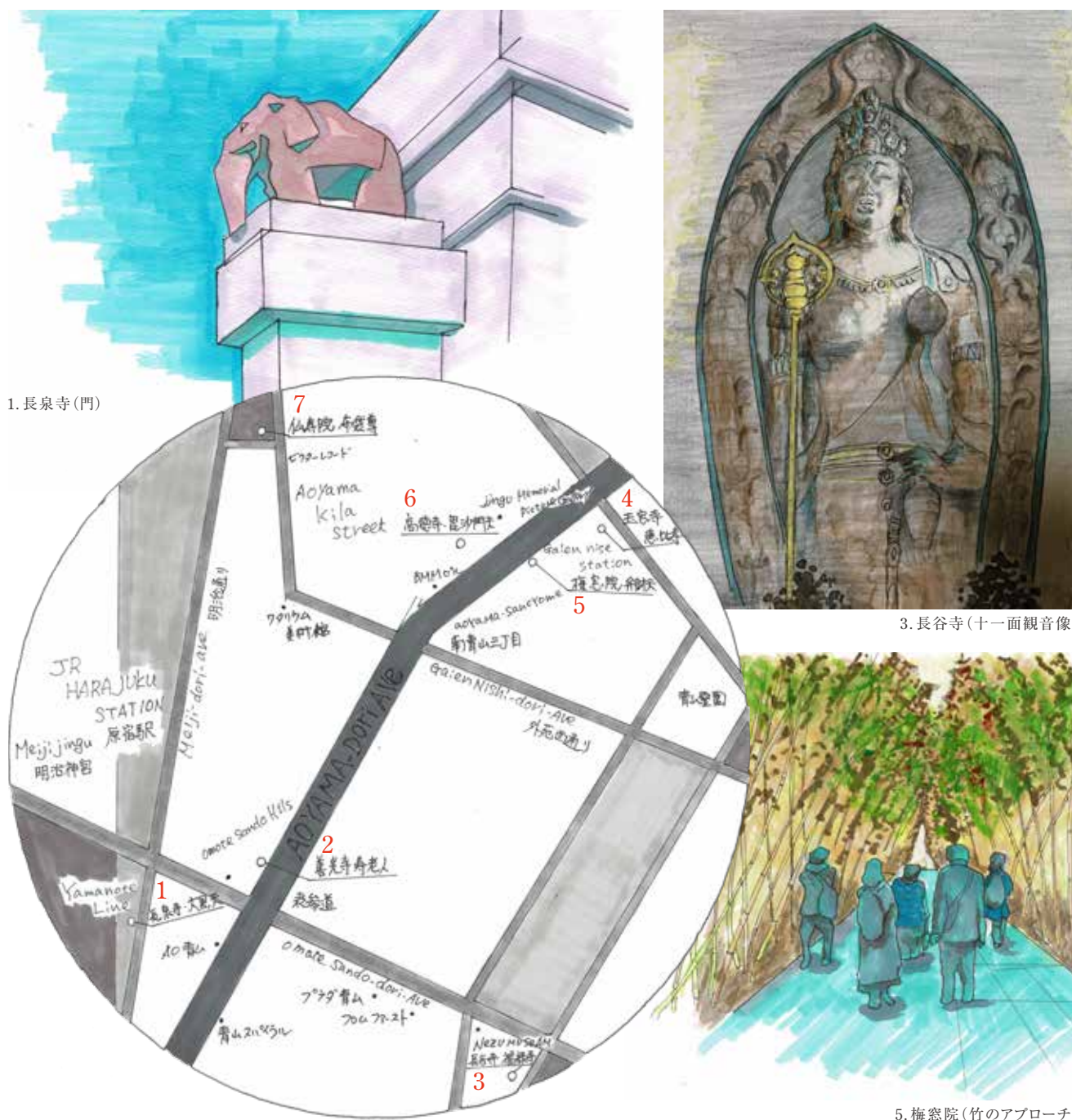
この会には、その街の文化や風俗、歴史、近代建築、パブリックアートに精通し

た方など、様々な見識を持った方が集まります。その新鮮な話を聞きながらの街体験は貴重な機会だと感じています。時には、歴史的な重大事件や小説・ドラマの現場を前にその話題で花を咲かせたり…。歩いている中で出会う路地裏の小さな石碑や道祖神にも、人々が大切にしてきた祈りや願いを、時を超えて体感することができ、万物には八百万の神が宿っていることを改めて思うこともあ

りました。

“七福神巡り”の企画は、「街を体験する」と共に、「先人達の足跡を再発見・再解析する」機会でもあります。この再発見の旅は世代や時間を超えて、文化を一步進めて理解しあえる貴重な時間だと感じています。様々な思いを胸に…今年も新春の心意気を七福神に願ってまいりました。

(文・スケッチ:委員長 高橋圭太郎)



1.長泉寺(門)

3.長谷寺(十一面観音像)

5.梅窓院(竹のアプローチ)

第204回aacaフォーラム 街とアートが織りなす出会いの場(その3)

開催日:2024年3月26日
話し手:高須賀活良さん
会場:サンゲツ品川ショールーム

フォーラム委員会

2023年度のaacaフォーラムは「街とアートが織りなす出会いの場」をテーマに3回実施。最終回となる第204回は2024年3月26日に品川のサンゲツショールームで開催しました。

講師としてお迎えしたのは、「モノづくりの始まりは『土』から」との考えのもと、テキスタイルデザインをベースとしつつ、境界を飛び越え多方面で活躍されている高須賀活良さんです。「領域をとかず:テキスタイルから考えるアートデザインまちづくり」というサブタイトルで多岐にわたる活動の遍歴をご紹介いただきました。多様性が求められる現代においては、既成の枠組みにとらわれない自由な躍動が時には求められます。高須賀さんはまさに、アーティスト、テキスタイルデザイナー、野良研究者、ハタオリマチのハタ印総合ディレクター、日本遺産プロデューサーなど様々な肩書きで躍動されています。展示し固定化されたアートよりも「今を生きる人間」を大切にする姿勢が根幹にあり、人と人を紡ぎ、歴史と場所を結び、領域を「こわす」というよりは「とくす」ことで次々と活動領域を拡張することになったそうです。

古くから織物の名産地として知られる富士吉田市での「ハタオリマチ」の活動紹介では、高須賀さんの熱い想いや行動が周りを巻き込み、いつの間にか人々の「自分ごと化」マインドを喚起・醸成し、一緒になって地域の活性化を楽しむ仲間たちを作り出す様子が語られました。

取り組みの一つ「ハタオリ学」。これは、地元の歴史を紐解き、土から素材を作り出すように、忘れられていた土地に眠る遺伝子を再発見し、「自分たちが自分たちの言葉で自分たちを語る」ための視点を整理するものです。

「テキスタイル基礎知識」に始まり「ハタオリ歴史学」「ハタオリ地理学」「ハタオリ民俗学」「ハタオリ音楽・文学」「ハタオリ人類学」「ハタオリ機械工学」「ハタオリ染色化学」「ハタオリ経済学」などで構成される諸章は、様々なレイヤーでの世界との関りが自分たちを位置付けているという気付きをもたらします。例えば「中国文明は絹、インダス文明は綿、メソポタミア文明は毛、エジプト文明は麻」というように、繊維と文明を結び付けて明確に分析。そのグローバルでクリアな視点で自分たちの地域に至るシルクロードという物語を紡ぎ出す考察が、自分たちと世界の関係を再認識させてくれるのです。

動画に登場した、自分たちの「仕事」と「まち」を誇りを持って語るハタオリマチの人々のはつらつとした姿は、高須賀さんという一個人の領域を超え、溶かし、地域が一体となった活気を感じさせ、わたしたちも参加したくなるような作用をもたらしました。わたしたちの固定概念を「とくす」契機を参加者のみなさんに強く印象付けたようです。

「自分にとってテキスタイルとは 領域と領域をつなぐメディウム(溶剤)みたいなもの」と語る高須賀さんですが、高須賀

さんご自身が世界をつなぐメディウムのような存在のように感じられました。

講演終了後は小一時間ほど懇親の場を用意。口元の潤滑剤の効果で、参加者間の自由な意見交換・歓談が楽しく行われ、参加者から「高須賀さん引率でハタオリノマチを是非視察したい!」と熱い要望が寄せられました。

(委員長 萩尾昌則)

※参考:<https://hatajirushi.jp>

※ハタオリマチの取り組みは、地域の活性化に向けたアートプロジェクトの手引きとして経済産業省が作成した「×ART(かけるアート)スタートアップガイドライン」にも一部紹介されています。



2024年aaca新春の集い

開催日:2024年2月20日

場所:田町センタービルピアタ3階(東京・港区)

総務委員会

2月20日、2月にしてはビックリするほど暖かで、夕方でもコートなしで出歩けるそんなうらかな日に「aaca新春の集い」が開催されました。

aacaでは毎年2回、会員交流会を開催しています。開催は2月の「新春の集い」と8月の「夏季交流会」。前期、後期の各期間に入会された新入会員と既存会員が顔を合わせ、おしゃべりして互いが打ち解けた関係を構築することを目的としています。お酒やソフトドリンク、軽いおつまみを用意し、立食形式で和気あいあいと語らう場です。

今回ご参加いただいた新入会員は、個人会員の津下庄一さん、音瀬陽子さん、法人会員の株式会社東京ブリック社代表取締役小野達大さん、リョービ

株式会社首都圏グループリーダー遠藤隆宏さんの4名でした。

定刻の18時、東條隆郎会長の挨拶で幕を開けました。会長からはaacaの沿革や理念、活動の歴史、aacaが目指すこれからの活動などが語られました。続いて、新入会員それぞれに自己紹介をしていただいた後、音瀬さんからご自身の活動について10分ほどのプレゼンテーションを行っていただきました。そして森暢郎副会長の乾杯の挨拶で歓談が始まりました。歓談の中ほどにはaaca各委員会の委員長や担当者より委員会活動を紹介しました。

会場には法人会員として入会した2社の製品サンプルやカタログなどの展示コーナーが設けられ、製品の特長の説

明を受ける人などで賑わっていました。

楽しい時間はあっという間で、宴たけなわの19時30分、岩井光男副会長の中締めで新春の集いはお開きとなりました。57名の参加者は、ほろ酔いの楽しい気分のまま二次会を求めて夜の街に散っていきました。



第11回aacaサロン 素材を活かす技法—日本文化の粋

会員増強委員会

日本画家と聞いて皆さんは誰を思い浮かべるでしょうか。巨匠 横山大観か風景画の東山魁夷か美人画の伊藤深水か。「日本画」とは明治以降、西洋から伝えられた油彩画と区別するためにつくられた言葉だそうです。

今回サロンにお招きした大沢拓也さんは漆芸と日本画技法をクロストークさせる日本画家です。人々の心に溶け込んでいる心象風景を浮かび上がらせ、見るものに幻影を見るような心地よい錯覚を抱かせます。素材や技術への関心が著しく高く、会場では素材サンプルや試作品を用いて制作手順や技法を分かりやすく説明していただきました。

繊細で気が遠くなるような工程と幻想的な作風の仕掛けには皆さん興味津々で、活発な意見交換がされました。

もう一人のゲストは壁材メーカー フッコーの杉山成明社長です。富士川清流、着物の染物屋が原点で、染色業から引き継がれる色の表現が、建物にまとう壁材にも生き続けています。

壁装の変遷や左官材料の色・質感・塗り味など、サンプルや左官道具を用いて丁寧に説明していただきました。

新しい近代工芸を探索する大沢さんと、建築工業とARTとの連関を目指す杉山さんは、コラボにより壁装材によるARTを生みだそうとしています。そのハイブリッドな取り組みも終盤に少し紹介していただきました。

お酒を嗜みながらの和やかな会となりましたが、この様な会を通じてaacaの活動を理解頂き、会員同士の交流の輪が広がることを期待しています。

(鹿島建設 篠田秀樹)

開催日:2024年1月19日

話し手:日本画家 大沢拓也さん

フッコー 代表取締役 杉山成明さん

モデレーター:鹿島建設 篠田秀樹

会場:aaca事務局(東京・三田)



作品を見せる大沢さん



《flux》大沢拓也



壁装ARTのモチーフ
《cerasus》



サンプルや左官道具を用いて説明する杉山さん
(左から2番目)

“市中の山居”の本質とは：研究成果を編集

情報文化研究委員会

建築もアートも言わば成熟期を迎え、文化的な街を創造するために残された課題は“心の充足”と私たちは考え、研究を進めてきました。

都市の喧騒の中であって心癒す“市中の山居”の本質とは…この命題に向き合うため、2018年、東京藝術大学で三人の識者による座談会を開催しました。あれから6年。さらに考察を深め、現在、その内容を小冊子「現代の市中の山居とは何か」としてまとめています。

近年、私たちが注目しているのが水辺です。生命の源・池には命が集い、賑わいを生み出す力があります。制作中の冊子では、“市中の山居”の歴史をたどると共に、地形的特徴のひとつである“池”を中核とする、不思議で潜在的な魅力

を有する地域—産学の英知が集う池のある街、住民が愛し活用する調整池、水との共存で集客力を有する商業の街—を紹介します。

会員の皆さんには、冊子が出来上がり次第、送付いたします。お楽しみに。

◎掲載内容(予定)

- ・aaca30周年記念事業:『市中の山居』座談会/内藤廣(建築家)、三谷徹(ランドスケープアーキテクト)、坂上直哉(美術家)
- ・原風景 過去から未来へ
- ・[インタビュー] 柏の葉アクアテラス: 現代の市中の山居
- ・[インタビュー] 町田市高ヶ坂松葉調整池: 市民と共に

・[インタビュー] 越谷レイクタウン:

夢の実現

・市中の山居を探るキーが“池”に?

・市中の山居を巡る活動 他

(委員長 高橋圭太郎)



座談会



高ヶ坂松葉調整池

ホームページのリデザインについて

リデザイン委員会

aacaでは協会主催活動や会員の活動について内外へ広く、強くアピールすべく各種発信物のリデザインを行ってきました。お手元に届いたAACA賞受賞作品紹介誌や会報をご覧になってそのデザインや内容の変化に気づいた方も多いと思います。

この「リデザイン」の最後のお披露目となったのが、4月1日にリリースした協会のホームページ(以下、HP)です。旧HPからの主な変更点は以下となります。

1. 建築、美術、工芸に携わる会員が集まる団体のイメージに相応しい洗練されたデザインとする。
2. 会員の活動を、分かりやすく訴求力をもって紹介する。
3. 協会外部の方々にも興味を持っていただけるよう内容や表現を魅力的なものとする。

4. 探したいものをすぐに見つけることが出来る使いやすさを実現する。

「会員紹介」ページでは、実績や経歴の紹介にとどまらず、ポートレートやイメージ写真、自身のHPやSNSのリンク先を掲載可能にしました。また、「デジタルギャラリー」では皆様の作品写真を分かりやすく一覧表示し、作家情報もカテゴリなどで簡単に検索できるようになりました。

この機能はクライアントや協業者が意中の作家を探し当てることの手助けとなり、会員の皆様自身のアピールの強い味方となることでしょう。

まずはHPにアクセスして感覚を試し、そして是非、「会員紹介」「デジタルギャラリー」などへの掲載依頼の申し込みを行ってください。手続きはHP内の[会員ペ

ージ>HP掲載依頼]から行うことが出来ます。

多くの皆様にご活用いただき、更に充実したHPに育てていただきたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。(委員長 木村慶太)



サイトトップページ



「デジタルギャラリー」トップページ

本物ってなに？

会員H & 会員K & 会員T

H: 前号から会報が新しくなって、協会会員外の有識者の寄稿が増えたね。巻頭の連載のテーマは共鳴なんだって。

T: 面白かったね。ものづくりにおいては、関係者がそれぞれの手腕に共鳴することで、より素晴らしいものができる。協働にはまさに共鳴が必要なんだよね。

H: そうだね。分野の違う話だから戸惑ったけど、本物の言葉からはヒントをもらえたよ。本物と言えば…

T: なになに？

H: 東京駅の駅舎の復元。

T: 2012(平成24)年に復元工事が終わって、100年前の開業当時の姿に戻ったよね。壮麗なドームをもつ3階建て。長年工事されていた駅前広場も整備されて、広々とした空間が皇居まで開けたから、なおさらカッコイイ。それで、東京駅の何が気になるの？

H: 東京駅が東京中央停車場として完成したのは1914(大正3)年。23年の関東大震災でもほぼ無傷だった頑丈な建物だったけど45年5月の東京空襲でドームと3階部分が焼失。東京駅炎上の様子は、内田百閒が『東京焼盡』に書き残してるね。

T: 戦後2年目の1947年には駅舎は再建されたけど、戦後すぐで資材も少なかったから、2階の上部に屋根を架ける、ドーム屋根は八角屋根にして再建されたんだ。直線で構成された駅舎は、ドームとは違ったカッコ良さがあったよね。



H: そうそう。で、建っていた期間を考えると、駅舎の完成から原型消失まで31年、戦後再建から復元まで65年。八角屋根の姿は、創建当時のドーム屋根の姿の倍以上の期間、多くの人の記憶に



残っているんだよ。しかも、八角屋根の駅舎は、ある意味では戦後日本の復興と成長のシンボル。そうすると、どっちが本物なんだろうってね。

T: 改めて言われるとその通りだね。でも、素直な感想として創建当時を再現した姿はカッコイイ。そのフォトジェニックさのお蔭で賑わいを創出しているし、創建時の姿という意味ではオリジナル。しかも設計は、近代建築の礎を築いた、近代建築の父・辰野金吾だし。辰野が設計して現存する作品の多くは重要文化財に指定されている。しかも東京駅舎は辰野式建築の集大成と言われるくらい建築思想が表れている建物なんだから、復元されて、本当に良かったと思うよ。こんどの7月に発行開始になる新デザインの1万円札にも印刷されるんだよ。

H: カッコよさについては同意見だし、建築遺産としての重要性も、辰野金吾に立ち戻る原形という意味も理解できる。だけど何がオーセンティシティなのか。

K: いきなりカタカナ。だから建築家って変に格好つけるって言いたくなるじゃない。どういう意味？

H: お、Kがいきなり割り込んできた。オーセンティシティって、何が「それらしさ」か、ってことかな。「らしさ」=「原風景」=「本物」って考えると、東京駅舎の原風景は、戦後65年をかけて人々の記憶に刻まれた八角屋根の駅舎なんじゃないか、と思うんだよな。

K: なるほどね。原風景を大切にすることはとっても文化的な行為。でも、果たして原風景って何なのか、をちゃんと考えなくちゃいけないってことだよな。最初の姿が原風景なのか。共に歩んだ記憶の量が

多くなっているものが原風景なのか。少し話はそれるけど、震災遺構なんかは、記憶に残すためにその状態のままにしてあるんだよな。東京駅舎に関しては、識者の間ではどういう議論があったのかな。

H: もちろん当事者の方々は詳細まで検討を重ねたと思うし、どこかで議論していたかもしれないけど、少なくとも世間を巻き込んだ議論にはなっていなかったよね。

T: そうだったね。首都東京の象徴となっている歴史的建造で、近代化の象徴でもあり、復興・発展の象徴でもあったんだから、議論が沸き起こるべきだったよね。日本人の感覚だと往々にして、国家的プロジェクトだから多分間違いなんて、議論する以前に疑問を持つことにも至らないのかも。

K: 自分たちの原風景をどう定めるか、どのような風景・景観を自分たちの資産としていくのか、といったことを考えるのって、それこそ、aacaが目指す文化的な社会ってどういうものなのかを考えることにも繋がってるじゃない。

H: 今回の復元が悪いと言っているわけではなくて、みんなで、自分たちにとって何が文化的なのかを議論をすることなく、復元されたのは勿体なかったなあ、と思うんだよな。

K: 建築や都市の保存・復元をするにあたっては、そういう議論が必要だね。

T: 東京駅に関しては、語りたいことはまだまだあるんだよな。ドームの床に広がる幾何学模様は八角屋根時代の天井を図案化したもの。いわば八角屋根駅舎へのオマージュ。素敵だよな。それと…

H: 話は尽きない…。これからもこんな感じで気になることを論じようね！

人や社会に寄り添うアート—坂上直哉

栗田祥弘 栗田祥弘建築都市研究所



私はオランダにいた時、アルノ・ファン・デル・マルクというアーティストの下で働いていた。彼は「アートはもっと人や社会につながるべきだ」と語り、都市計画、ランドスケープ、建築などの計画提案の段階からコラボレーションし、人や社会に近いま

ちや風景に直接アートをつくろうとしていた。私はそのアート活動を3年間にわたり建築家としてサポートした。その影響もあってか私にとってアートとは、美術館に展示されている作品というより、まちの中にあるその土地の背景や風土に基づい

た心に響くものという印象が深かった。

その後私は日本に戻り、アトリエ系設計事務所ではばらく働いていたが、その時に人の紹介で美術家の坂上直哉と出会った。坂上の活動を聞いていくと、多少の違いはあるものの、オランダのアルノと同じような思想で空間や風景と融合したアートを日本で実践している稀有な人物であると気付いた。無機質で機能優先になりがちな場に夢や希望を与えていた。

その坂上の代表作の1つが羽田空港の空港到着階の出会いの広場に設置された翼の作品である。飛行機の翼にもコガネムシのような生き物の羽をも想起させるアートは、ステンレスが持つ特性を引き出し、自ら様々な色を発している。「虹にそまって」と「虹にむかって」という2つの翼は空港という場所性とうまく融合し、飛行機と空港が持つ独特の高揚感をこの空間に与えて増幅させ、多くの人々を出迎え愛された。ターミナルのリニューアルにともない、これらの作品は玉川学園の校舍吹抜けへ移設され新たな使命を坂上より与えられた。学校をインキュベーションの場ととらえ、そこから飛び立つ若者に夢を喚起させ、アートと若者の姿をだぶらせた。

空間や風景には人や社会を変える力がある。そこに必要なのは「人や社会に寄り添う心」という名のアートではないかと感じるのである。



玉川学園《虹にそまって》撮影：筆者



羽田空港《虹にそまって》撮影：木村恵一

催事情報

[第7回BOX展]

建築・建築素材・美術・工芸関係各者・学生の皆さん等、様々なジャンルの方々の交流の場となり、そこから生まれる新たなエネルギーが刺激し合う、他には無い新しい展覧会を目指しているBOX展。30cmキューブの小宇宙を、得意な素材を使った表現で自由に遊ぶ。まじめだけど面白い展覧会です。

・2024年6月8日[土]~14日[金]

・11時~18時(最終日16時まで)

・会場: 建築会館1階ギャラリー
(東京都港区芝5-26-20)

※オープニングレセプション: 6月8日[土]15時~

※表彰式: 6月14日[金]14時~

※詳細は以下のQRコードからご覧ください。



委員会だより

[文化事業委員会]

[地域創生が生み出す景観]vol.3

文化事業委員会では「地域をデザインする」をテーマにした研究・情報発信に取り組んでいます。

3回の連続講演の実施後、関係者が一堂に会してシンポジウムで話し合うというサイクルをワンセットとしたシリーズ企画。

この4月から、一昨年に続く第3弾が始まりました。実施した2回の講演会では、過疎化に悩む街に住みながら街の活性化に尽力し、その景観の変化を体感した方々に登壇いただき、参加者との間で活発な意見が交換されました。

・第1回講演会(4月23日)

千葉県流山市(DEWKSを惹きつける徹底した街づくりと市民サービスで人口増加率7年連増No1を実現)

登壇者: 大西康之氏(ジャーナリスト)

・第2回講演会(5月13日)

島根県隠岐諸島(コミュニティデザインにより活性化したしまづくりでUターン移住者を増やす)

登壇者: 西上ありさ氏

(studio-L TOKYO代表)

第3回講演会は、詳細が決まり次第、協会のニュースレターでお知らせします。

ニュースレター配信登録について

協会が主催するイベントや会員活動の情報をお届けする「ニュースレター」。会員に限らずご希望された方に、随時配信しています。

配信を希望の方は、件名に「ニュースレター配信希望」と記したメールを、事務局までお送りください。送信いただいたメールアドレスに、ニュースレターをお送りします。

aaca事務局: gijiroku@aacajp.com

編集後記

今号から新たなシリーズが二つ登場しました。「素材を知る」は、皆さんが携わる専門分野について教えていただく企画です。今号のレンガ篇では、技術の発達で本来のレンガの良さが失われてしまったことにも驚きましたが、それを技術の力で復活させた、という点には驚きでした。今後も、専門分野の“へえ〜”を、建築材料に限らず紹介していきます。

もう一つは「建築美術工芸・よもやま話」。これは、建築、美術、工芸に関して気になることをあれこれ話してみよう、という企画です。意見を言い合う事って面白い、ということを皆さんと共有したくて記事にしてみました。

それぞれ、扱ってほしい素材や話題などありませんか? 皆さまからの連絡をお待ちしています。

(勝山里美)

本誌の内容に関するご意見・ご感想は、広報委員会までお寄せください。koho@aacajp.com

aaca|2024.05|no.98

発行日:

2024年5月27日

発行人:

会長 東條隆郎

発行:

一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6F

TEL 03-3457-7998

FAX 03-3457-1598

URL <http://www.aacajp.com>

E-Mail info@aacajp.com

編集:

広報委員会

編集長 勝山里美

委員長 田島一宏

副委員長 中村弘子

委員 金原京子 齋藤潮美 竹生田正

森田高年 山崎和子

表紙・フォーマットデザイン:

矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

1889年のパリ万国博覧会に際し、幾多の反対に晒されながら完成したエッフェル塔が、いつしかパリのシンボルと評されるようになった。2024年のパリオリンピックでは、そのエッフェル塔はじめ、セヌ川も含めた周辺の施設が会場になるといふ。グラン・パレではフェンシングとテコンドー、アレクサンドル3世橋に関しては、自転車、トライアスロン、水泳と言ったように……。この情報に接すると、1925年4月から10月迄(11月8日迄延長)、セヌ川左岸のオテル・デ・ザンヴァリッドから、アレクサンドル3世橋を経て、セヌ川右岸のグラン・パレ、プティ・パレ迄の間が会場となったパリ万国博覧会(現代産業芸術国際博覧会)が、時が遡かされたかの様に甦ってくる。別名アール・デコ博覧会と言われたように、アール・デコ様式の建築がほとんどだった中で、異彩を放った二つの建築があった。一つが、フランスの建築家ル・コルビュジエが設計したエスプリ・ヌーヴォー館。もう一つが、話題をさらった建築の最高賞を受けたソヴィエト連邦館。当時35歳だったコンスタンチン・メーリニコフが設計し、その1歳年下のアレクサンドル・ロトチェンコが、内部の《労働者クラブ》を設計した、木造の構成主義の建築だった。エスプリ・ヌーヴォー館は、1977年、ル・コルビュジエ財団も加わり、イタリアのボローニャに再建された。今も新精神の息吹を感じられる、おすすめしたい約100年前の建築である。(矢萩喜從郎)



 三菱地所設計
Mitsubishi Jisho Design

www.mjd.co.jp

働き方はより自由に。
働く場をより創造的に。

OC Portable battery
【オーシー】
電源を持ち運び、好きな場所で自由に働けるポータブルバッテリー。

WORK CARRIER
【ワークキャリアー】
人と空間をつなぎ、自然にコミュニケーションが生まれるデスク&ソファシリーズ。

SPRINT
【スプリント】
チーム力を最大限に引き出し、成果の高いアウトプットを実現する場づくりをサポート。

人を想い、場を創る。

OKamura

株式会社オカムラ <https://www.okamura.co.jp/>

